静岡・仁田館（にったやかた）遺跡

1　所在地　静岡県田方郡函南町仁田地先
2　調査期間　二〇〇一年（平13）四月～六月
3　発掘機関　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
4　調査担当者　鈴木武之・岩本　貴
5　遺跡の種類　居館跡
6　遺跡の年代　古代～近世
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

仁田館遺跡は、狩野川支流の来光川によって形成された微高地、後背湿地上に立地する。源頼朝挙兵に貢献したと伝えられる仁田忠常以来、仁田氏歴代の居館として知られ、遺跡の周囲には堀と土塁が遺存している。遺跡東側の丘陵部には、国史跡の柏谷横穴群をはじめとして多くの遺跡が分布している。二〇〇一年度は、館跡の北端部を調査し、近世の礎石建物や古代から中世の柱穴群・溝・自然流路などを検出した。中・近世の陶磁器をはじめとして、柿経など多種多様な遺物が出土し、伊豆地域における土豪の生活をうかがい知るうえで貴重な資料といえる。

（沼　津）

柿経は、館跡の北東隅を流れる古代から中世の自然流路から出土した。建物群の検出面から自然流路へは、高低差三m以上の急激な崖面となっており、崖基底部付近には護岸と推定される長さ五m以上、径三〇cm以上の大木が横たわっており、これが一〇～三〇cm程度の間隔で打たれた径五cm程度の丸杭によって固定されていた。柿経はこの護岸の下位からまとまった状態で出土した。

8　木簡の釈文・内容

(1)「妙法蓮華経授記品第六」　(3-6-1)　209×13×0.6　011
(2)「妙法蓮華経化城喩品第七」(3-7-1)　225×15×0.6　011
(3)「薩宝月菩薩月光菩薩満月菩薩大力菩薩　一ノ二」　(1-1-21)　217×14×0.6　011
(4)「持法緊那羅王各与若干眷属俱有四　百千」　(1-1-34)　(216)×11×0.5　019
(5)・「若有人礼拝或復但合掌乃至　〔×人〕　」
・「若人散乱心乃至以一華於供養画像漸見無数仏」　(1-2-206)　209×13×0.8　011

(6)

「利菩薩観世音薩得大勢菩薩常精進菩」
菩　　(1-1-19)　214×13×0.6　011

(7)

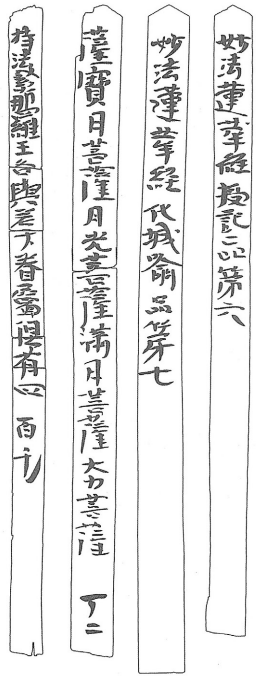
〔渇カ〕
□惱急甚可怖畏此苦難処況復方便　(2-3-269)
子無知雖聞父誨猶故楽著嬉戯不已」　(2-3-270)
(221)×14×0.6　081

(8)

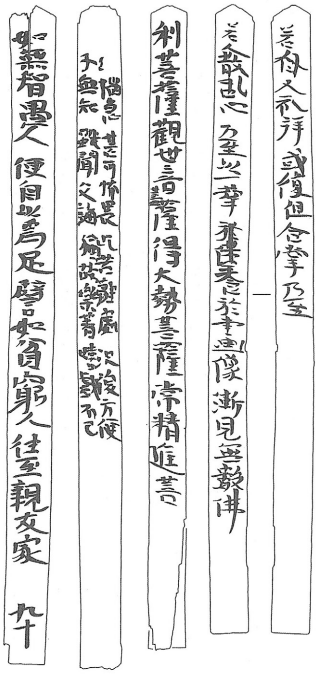
如無智愚人便自以為足譬如貧窮人往至親友家　九十」
(4-8-120)　(219)×14×0.6　081

(括弧内数字は、妙法蓮華経の巻-品-行をあらわす)

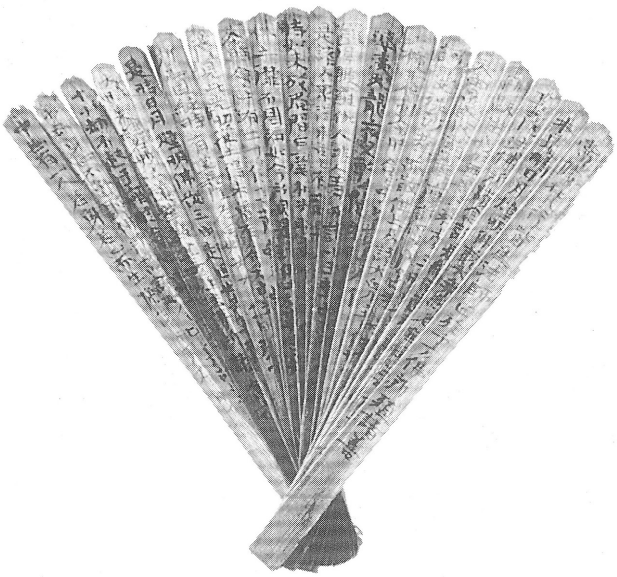
柿経は、欠損品を含め八六五枚が確認されている。片面に法華経を写経し、序品第一～授学無学人記品第九の断片が確認されている。板の形状は、上部が圭頭状で、長さ二一・五cm幅一・五cm厚さ〇・六mmを測る（いずれも平均値）。中には裏面が透けて見えるほどに薄いものもあり、いわゆる台鉋の成立以降の所産とすることができよ



(1)　(2)　(3)　(4)



(5)　(6)　(7)　(8)



う。資料のうち四枚には両面に写経したものが確認されているが、いずれにも書き損じが認められることから、反対面に正しい経文を書き直したものと推測される。共伴した陶磁器と柿の形状から、一五世紀中葉前後の所産と推測される。

経文の順番を示す巻束番号を法華経全巻を通じて二〇枚おきに記すことが特徴である。また巻束番号の表記が一部不統一であることから（⑶「一ノ二」、⑻「九十」など）、手本経に記された巻束番号不統一もしくは複数存在の可能性があろう。二〇枚一把のうちの一九枚目に相当する柿板に二行の経文を無理やり書き込んでいるものが存在し（⑺）、柿板があらかじめ二〇枚一把にまとめてあり、写経時の書き損じや板の破損、あるいは元々板が一枚不足していたが、補充する状況になかったことを示していると推測される。したがって、それ以降の巻束番号に狂いは生じていない。

柿経は現在整理中であるが、資料の評価にあたっては、奈良大学の水野正好氏、静岡大学の湯ノ上隆氏のご教示を得た。

9　関係文献

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所「こけら経　函南町仁田館遺跡」（『研究所報九五』二〇〇一年）

同「こけら経が大量に出土　来光川遺跡群・仁田館遺跡」『年報一八』（二〇〇二年）

（岩本　貴）